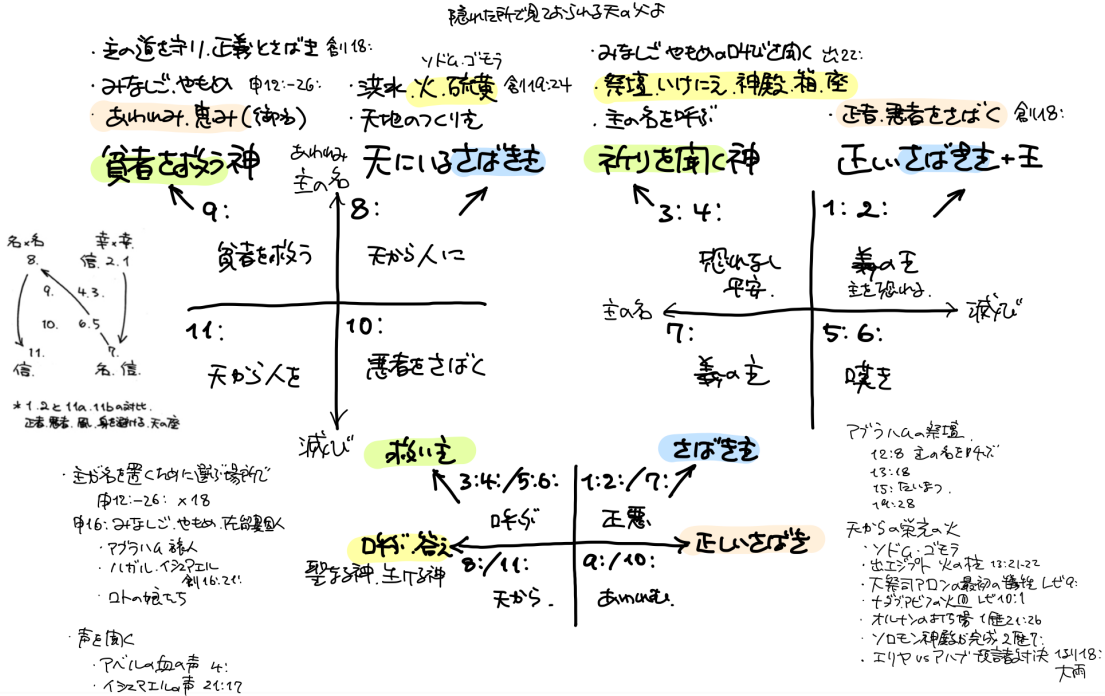




詩篇第一巻

詩篇1-11篇

詩篇第1巻1集 (1:-11:) 天の父よ 2019.8.8



1篇から11篇まで。「天の父よ」という段落にまとめてみました。

32篇からのところが主の祈りの6つの課題を話していました。1集は「天の父よ」ということで良いと思います。

みなしごの父、やもめのさばき人は、聖なる住まいにおられる神というのが、詩篇68篇にあります。9篇、10篇あたりに、みなしご、やもめ、貧しい者の話が出てきます。隠れたところで見えておられる天の父に祈り、叫び、その名前を呼ぶと答えてくださるといようなことが書かれています。

全体を「天の父」ということですが、父であるアブラハムについて(アブラハムは天の父を表しているものということだと思います)創世記18章に、このようにあります。ソドムとゴモラの裁きの箇所、甥のロトを守るためにとりなしの祈りをする箇所です。御使いたちが来てアブラハムのところを訪れました。アブラハムを選んだ理由が書かれています。

「主はこう考えられた。私がしようとしていることをアブラハムに隠しておくべきだろうか。アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、地のすべての国々は彼によって祝福される。私が彼を選び出したのは、彼がその子らと彼の後の家族とに命じて、主の道を守らせ、

正義と公正を行わせるため、主がアブラハムについて約束したことを彼の上に成就するためである」と。主の道を守らせて正義と裁きを行わせるということがアブラハムを選んだ理由です。

それで、その裁きを下すと言った時に、アブラハムは「正しい者を悪者と一緒に滅ぼし尽くされるのですか。50人のうちに、45人のうちに、40人のうちに」という箇所です。「全世界をさばく方は公義を行うべきではありませんか」と。

アブラハムが選ばれた理由と神様は同じ正しさを行っている。「正しい者と悪者を一緒にするようなことをなさるはずがありません」という神様のなさる裁きについて、訴えてとりなしているところです。この正しい者と悪者を一緒に滅ぼすことはないという悪者。この悪者が1篇に3回、4回出てきます。悪しき者…、正しい者…。この主の教えを喜びとしているのは、主を恐れる正しい者ということです。

このさばきに堪えないと言って、さばきは正義と公正の、公正はさばきという言葉そのままです。ミシュパッド。それと、罪人、罪人とここにあります。罪人はソドムの墮落。罪人が横行しているところの言葉が最初です。それと悪しき者と書いてあるこの悪しき者が創世記の18章で正しい者と悪しき者と言っているところも、この言葉の最初です。

主の道を守らせると言って主の道に歩むということです。歩まず、立たず座らぬ。そして正しい者の道を知っている。悪しき者の道は滅びるというキーワードを見ると、これは(1:3)栄えるということです。栄えるとは、祝福されるということですけれども、祝福される者は、正しい者と悪者の裁きの話として出ていますので、2節を見たり3節を見たりした時に、ヨシュア記1章やエレミア17章を思い出したのですが、これはまず最初にアブラハムの18章の箇所を思い出さなければいけない詩篇なのだということは、キーワードの連鎖でいちばんはっきりわかります。

正しい者と悪い者、悪しき者というのが第1集と第4集に多いわけです。「幸いなるかな、幸いなるかな」というこの1篇の始まりと2篇の終わりのところにある「幸いな者よ」と言って主のおきてを守る話になっています。第4集も幸いな者よというのがたくさん連鎖のキーワードとして出ていますので、第1集と第4集が並行しています。

そして山上の説教で教えられているところの主のおきて、主の道とその祝福、裁きということがテーマである山上の説教と呼応しているというのは、そういうところから出てきます。

「天の父よ」と言ってアブラハムがその役割をとりなしの祈り、正しい裁きをしているというところから始まるこの第1集ですね。第1集を7篇までと11篇までと、この2つに4つずつが分かれてるでしょうということで分けています。それで、それぞれをまた4段落に分かれているということで、大きな流れとしては、1,2と7。3,4と5,6。8と11。9と10。

それは随分前にやりましたけれど1,2と3,4,5,6。これが真ん中であって、7に連鎖する。8があって真ん中に9,10があって11に連載するというキーワードが1,2は「幸い」で繋がっています。2の終わりに「主により頼む者は幸いです」それで7の始まりに「主により頼みます」7の終わりは「主の名をほめ歌います」。8の最初は「主の名をほめ歌う」「主の名」に囲まれています。8篇は。「主の名」に囲まれて、11篇の出だしは「私は主により頼む」。そして「主により頼む、主に信頼する」で終わっています。この外側の1,2、7、8、11はリレーみたいになっている構造です。それは第4巻も周りにリレーのようなものがありましたので、その形も第1集と第4集は似ているということです。

9と10はアルファベットの詩篇です。アルファベットがABCDEFGと続いているので、これはセットです。一つの詩篇と見ることが、ユダヤ人たちの区分だと一つの詩篇になっています。一つの詩篇になっていますけれど、半分に分けることはできませんので、9と10でも構造上は同じことになると思います。3,4,5,6は「朝起きて」とか、「夜寝る時に」みたいな意味でも繋がっている感じがしますので、外と中、外と中というのが大きな流れのいちばん大きいところだと思いますけれど、外と中、外と中。1,2と7。こちらは神様は正しい裁き主である。その裁きその裁き主の裁きを行う王様について。これが1,2と7。3,4と5,6は、祈りを聞いてくれる神様。主の名を呼ぶと答えてくださる神様というのがこの真ん中のところということです。8と11。これはさばく神様なんですけれど、そのさばく神様は、天にいるさばき主です。天からさばきを下す創造主であるというのが8と11です。

9と10のところは、みなしご、やもめ、貧しい者を憐れんでくれる神様、救ってくれる神様という共通点があります。

その四つの並行をまとめたのが下の図になっています。正しいさばき主、そのさばき主は天からさばきを下す。祈りを聞いて答えてくださる救いの神。その救いの神様は貧しい者を憐れむ。これが主の名を呼ぶと主の名を表すという感じです。

主の名を呼ぶことと、主の名、憐れみという名前が現わされるという並行があるんじゃないかということで、さばき主と救い主、この水色のところと緑がその並行として大きな流れとしてあると思います。

もう一つこの区分の中で見なければいけないのが、このオレンジ色と黄色の正しい者と悪者をさばくということと、憐れむは、さばかないみたいな感じですから、正しい者と悪者をさばく。そして憐れみをもったさばきであるというさばきの話。

それと祈りを聞く神様の話の中で、祭壇、いけにえ、神殿、御座という主の名を呼ぶと天から答えると、火と硫黄が11篇にありますね。火と硫黄。暴虐を好むというこの暴虐は、ノアの洪水の時にこの地の者たちは暴虐に満ちているという暴虐です。山に向かって逃れる。山に逃れよというのは、ロトのことも思い出します。創造を思い出す8篇ではあるのですけれど、ノアは再創造主みたいな形です。「生めよ、増えよ、地を満たせ、地を従えよ」と言われているアダムに与えられた時の8篇のようにも見えますけれど、ノアに与えられた命令ということも言える8篇だと思います。

名前が全地にというのはバベルの塔の反対みたいな感じですか。この主の名を呼んで、呼ぶと神様は答える。天から答えるというこの並行があるのではないかということで、正しいさばき、憐れみのさばきと、呼ぶと答えるという並行をここで見ていました。

全体像です。主の名を呼ぶと答えてくれるということのアブラハムはしていたのかというとしていました。アブラハムは連れ出されて最初に祭壇を作りましたよね。(創12章)

自分の生まれ故郷を出て、約束の地に行けと言われて出て行って、最初にベテルとアイに祭壇を築いて主の御名によって祈った。祭壇を築くということは何度もアブラハムがわざわざしますよね。主の名を呼ぶ場所ということだと思います。創世記19章28節。ソドムとゴモラの裁きもたいまつの話の契約のところも、かまどの煙という言い方もありますので、天から火が下ってきて、祭壇のようになっている。ソドムとゴモラ町全体が全焼のいけにえになったということです。その意味で祭壇を作って祈ると「主を呼ぶ」ということはアブラハムがやっていたこととして考えられるものです。正しい者と

悪者をさばく。とりなしの祈りをすると神様は天から答えてくれる。その呼ぶ話は祭壇、いけにえ、神殿、立ち上がってくださいの契約の箱、御座があるという言い方が1からのところに出てきます。

祭壇、神様を呼ぶと 主の名を呼ぶ呼び方ということ。いけにえを捧げるということ、主の名を呼んでいるというのはいけにえを捧げているという行動です。そうすると天から火を下して答えてくれる。栄光の火を下して答えてくださるというすごい答え方です。

それはソドムとゴモラの時がそのような火が下る。火と硫黄の裁き。出エジプト記の時に火の柱が先導して導いて主の道に導いてくださった。大祭司アロンの最初の任命されていけにえを捧げた時に、天から火が下りました。すぐにその後、ナダブとアビブが異なった火皿を捧げると天から火が下りました。ダビデが神殿の場所はここだと言った時のオルナンの打ち場の時に、天から火が下ったということなので、「ここが、これこそ主の祭壇だ。これこそ主の住まいだ」ということで、その場所に決めたときにも火が下りました。

ソロモンが神殿を作って祈りを捧げた直後に天から火が下って神様が答えてくださいました。エリヤとアハブの預言者の対決というのが第一列王記の18章にありますけれども、ここで偽物の預言者と本物の預言者はどっちなのかという対決しています。預言者たちが集まってエリヤと対決する時お互いに神様の名前呼びましょうと。火から答えてくださるはずだからということです。神様は呼んだら火で答える。どっちが本物なのか対決しましょう。エリヤがもちろん勝つわけですが、そこで具体的に呼んで火の裁きを求めるという出来事が18章に書いてあります18章自体はずっと3年間雨が降ってなくてその対決があったわけです。それで、終わったところで大雨が降ったということなので、火が下ったのですけれども、天から雨を降らせるということもまた祈りに答えてくださること。正しい者にも悪者にも雨を降らせるという箇所もありますね。雨を降らせてくださる神様ということはこの天から火を下すとアブラハムが作っているの祭壇というものからも、この祈りを聞くと叫ぶと答える、主の名を呼ぶと聞いてくださる神様だということがあらわされるのでこのような言い方がたくさん出てくるんだろうと思います。隠れたところで見られる天の父を呼ぶ呼び方のように。祈り、祭壇、いけにえということです。

その神様の名前を置く場所にヨシュアたちは戦って入ってくわけです。約束の地。その約束の地に入って行った時に具体的に何をしないといけないかということを申命記で教えられていますけど、特に12章から26章までのところでこういうことをしなさいという具体的な教えが書いてあります。「主が名を置くために選ぶ場所で」という言い方で、約束の地の話をします。主が名を置くために選ぶ場所と言いは、12章から26章までの間に18回も出てきます。特に16章のところで、みなしご、やもめ、在留異国人の心配をしてくれている。憐れみの神様の正しさを行いなさいということがずっと言われています。

みなしご、やもめの叫びを聞かなければいけないと出エジプト記の22章では言われています。その箇所をずっと長く話しています。

アブラハム在留異国人でした。やもめ、みなしごの祈りを聞いてくださったのは、ハガルとイシュマエルの出来事の中に出てきます。創世記の16章、21章。このハガルの祈りを聞く、イシュマエルの声を聞くとようなことも出ていました。これが憐れみの神様を表しなさいという教え。それを行いなさいということを9篇、10篇の中で強調されているということですので、主の名、憐れみ、めぐみという主の名です。その名があらわ

されるようにというのが、9篇、10篇。その名を呼んでいるというのが、3,4篇、5,6篇。3,4篇は祈りを聞いてくださるので恐れが無い。5,6篇は聞かれていないというような状態に見えるので嘆いているという並行があります。

というように見ていくと祈りを天の父に捧げると祈りを聞いて正しいさばきを行ってくださるというアブラハムに約束して下さっている主の道を守って、正義とさばきを行う民というものを作っている。民を作っている出だしの詩篇の第1巻第1集のところで、天の父とアブラハムのことを連想するようにして天の父について教えてくれている構成になってるのは相応しいということです。

この段落に特に、国々、敵、国民、山、シオン、天、天の民、アブラハムは大いなる国民になるということを表すような悪者、悪、不法、正しい者、貧しい者というキーワードも多いですね。それと滅び、叫び、さばくこと、憤り、こういう神様のさばきというのも、たくさん出てくる詩篇の第1集です。